1998年度「海外文化研修」
—報告：成果と意義—

鳥飼玖美子

立教大学における新しい英語カリキュラムが開始して 2 年目の今年度より，2 年次以上を対象にした「英語自由選択科目」が開始した。その一科目である「海外文化研修」は，1998 年 7 月30日から 8 月 23 日までの 4 週間，米国ミネソタ州セントポール市郊外にあるバプテイスト系ベセル大学(Bethel College, St.Paul, Minnesota）にて行われた。

立教大学において，短期の海外語学研修が正式にカリキュラムの一環として実施されたのは，これが初めてであり，いったい何名位の学生が応募するかも不明であったが，募集を始めてみると，定員 30 名のところに 100 名の応募があった。英語教育研究室では急遽，ベセル大学側と交渉し，定員を 50 名まで増やすこととした。選考は，英語力を見るよりは動機づけを重視することとし「なぜアメリカに行きたいのか」「アメリカで何を学びたいのか」について，日本語でエッセーを書いてもらった。その結果をもとに 50 名の参加者を決定した。

参加者の内訳は，女子 42 名，男子 8 名である。学部別では，文学部 25 名，法学部 9 名，経済学部 7 名，社会学部 4名，理学部 2 名，観光学部 2 名，コミュニテイ福祉学部 1 名であり，学年別では 1 年生 19 名，2 年生 18 名，3 年生 13 名である。4 年生の参加はなかった。

この研修プログラムの特徴をまとめると，概略以下のようになる。

1　正規科目として単位認定

正規カリキュラムの一環として位置づけ，単位を認定する。

1 年次生の場合は，「必修英語科目」前期 4 単位分に振り替えられる。

2 年次以上の学生の場合は「英語自由選択科目」4 単位として認定される。

2　事前研修，現地での研修，最終レポートの組み合わせ

参加学生は，前期，週 2 回の事前研修を受けてから，現地での研修に参加し，研修終了後は，英文レポート(8 枚)を提出した。

事前研修では，英語面での準備にとどまらず，異文化理解，アメリカ社会

等について学習するほか，学生が自ら，現地でリサーチを行いたいテーマを見つけ，ある程度の事前準備および討論を行う。

帰国後に提出する最終レポートは，自分が選んだテーマに添って現地で調べたことを英文レポート 8 枚にまとめる，というものである。

成績は，ベセル大学からの成績と最終レポートの評価を総合し英語教育研究室が決定する。

(事前研修については，今年度の反省に基づき，99 年度は週 1 回とする予定である)

3　立教のための研修プログラム

現地プログラムは，ベセル大学異文化間コミュニケーション研究所が立教大学のために用意しており，いわば特別注文の研修である。

他大学の参加がない為，完全に立教大生に合わせた内容のカリキュラムが可能である。

但し，同じ大学からの参加者ばかりだとつい日本語になってしまう，という欠点も考えられる。そのマイナス面を避けるため，事前研修も含め，研修中は英語のみの使用を義務づけている。

4　ホームステイ中心

英語そのものを習得する，というよりは，むしろ文化の理解に力点をおいたプログラムである為，ホームステイが研修内容の核となっている。

したがって，ベセル側では，一軒の家庭に一人の学生，という方針を貫いている。業者主催のホームステイでは，一家庭に複数の学生が滞在することがあるが，このプログラムでは，50 名の参加学生は，それぞれ別の家庭に滞在する。

引受家庭は，学生の食費に相当する実費を受け取る以外は金銭的報酬のない，ボランテイアである。プログラム関係者の友人/知人数百名の中からふさわしいホスト家庭を選んでいる。

ベセル大学での英語研修内容は，ホストファミリーに質問して得た答えを軸に展開し，ホームステイと授業が有機的に結び付くよう工夫されている。

5　研修内容

実際の研修内容は，午前中のESL (English as a Second Language) 授業，ベセル大学専任教員による英語での講義，および午後のフイールドトリップ，週 1 回の学生による自主的な討論(デイスカッション，デイベート等) から成っている。

*英語授業

英語の授業は，毎日午前中に行われる。前日に宿題として出されたテーマについてホスト家庭に質問し，その結果を英語で簡単にまとめて書くと同時に，授業中に発表し合いデイスカッションする，という形態が中心である。

各クラスとも 8 名から 9 名の小人数である為，発言しやすい雰囲気である。

同じテーマで各家庭からの答えを持ち寄るとその意見は千差万別であり，期せずしてアメリカ社会の多様性をかいま見ることとなったり，話しが弾んで教師から日本の事情を聞かれ，四苦八苦しながら説明する姿も見られた。

アンケート調査では回答者 25 名のうち全員が，英語の授業を「役立った」と評価した。良かった理由として挙げられた主なものは「アメリカの文化や考え方を知った」(8 名)，「自分で考え話す，ということを学んだ」(4 名)，「授業がホスト家庭とのコミュニケーション材料となった」(4 名)，「明るい雰囲気で，自分の意見をはっきり言えた」(2 名)，「小人数だったので意見を言う機会が多かった」(2 名)「テーマが興味深かった」(2 名) 等である。

***講義**

ベセル大学専任教員による英語での講義は，研修後のアンケート結果を見ても，非常に好評であった。中でも，教育問題，人種問題，高齢化社会について等のレクチャーは，講義後に活発な質問が相次いだ。人種問題の講義では，ヨーロッパ系アメリカ人，アフリカ系アメリカ人，アジア系アメリカ人の3名の教員が，それぞれの立場から語り，時に互いに議論をし，米国社会における人種問題を多面的かつ具体的に提示し，学生に感銘を与えた。

***フィールドトリップ**

フイールドトリップは，毎日，ほぼ2箇所ずつ用意され，好きな方を選んで参加するようになっていた。

昔の農家を再現した農場，古本と骨董の町，地元テレビ局，警察，裁判所，劇場，美術館，野性動物保護地区等々，盛りだくさんであった。

参加学生が特に関心を持ったのは，ホームレスシェルター，難民学習支援センター，保育園などであった。

アンケート調査では，フィールドトリップが毎日では疲れる，もう少し行き先をしぼった方が良い，という意見が見られた。そこで来年度は，フイールドトリップを少々整理し，その代わり学生が希望するテーマでの講義を増やすことも検討中である。

今年度の場合，週末のキャンプ旅行が研修に組み込まれていたが，出発前に「アメリカ文化における自然感とキャンプの意味」についてのレクチャーがあり，フィールドトリップと講義がうまく連動したケースとなった。

***最終レポート**

研修中は，「帰ったらレポートを書かねばならない」という心理的負担が大きかったようで，ベセル大学の学生と同じように自由に使える図書館やコンピューター室で調べものをしたり，夜も自室で勉強する学生が多く，現地の担当教員，ホスト家庭などが「勉強しすぎではないか?」と心配したほどであった。

しかし，事前研修時から自分で選び，あたためてきたテーマを実際にアメリ

カで調べ，英文レポートにまとめた達成感は相当に大きなものがあったようである。単位をもらうのだから当然の義務だ，という考えとともに，我ながら立派に書けた，という気持ちが強い自信につながった様子が，学生の声からうかがわれる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

「海外文化研修に参加して学んだこと」として参加学生があげたものは実にさまざまである。もっとも多かったのが「アメリカ文化」〔12 名）であり，次が「コミュニケーションの手段としての英語」（5 名）である。「異文化との接触」（2 名）「言語や文化が違っても共通点があること」（2 名）「つたない言葉でも異国の人と理解しあえること」（1 名）「自己主張の必要性」（1 名）などを含めると，広義での「異文化理解」「異文化コミュニケーション」に関する成果をあげた参加者は，25 名中 23 名にのぼる。

外国語学習を成功させるのに欠かせない要因として学習者の「動機付け」（motivation）がある。このモテイベーションには「道具的動機」（instrumental motive）と「総合的動機」（integrative motive）の 2 種類がある，とされる。外国語上達には，就職や試験など何か具体的な「道具的動機」があった方が良いだろう，と一般的には思われがちであるが，R. C. Gardner の第 2 言語習得理論研究によれば，むしろその言語を話す人々および文化に好意や興味を持つ「総合的動機」を持っている方が，外国語学習は成功する，という。

また，認知心理学的に動機付けを分類すると，内発的な "intrinsic motivation" と外発的な "extrinsic motivation" とに分けられる。これまでなされた多くの研究では，試験や賞罰など外から与えられる動機より，自らの内部から生まれた動機の方が長期的にはるかに有効であり持続性がある，という結果が出ている。

つまり英語学習を例にとってみれば，試験があるから，就職に有利だから，英語を勉強しなければ，という種類の動機付けより，英語圏に住む人々と話し合いたい，理解し合いたい，だから英語を話せるようになりたい，と自ら望む方が動機付けとしては効果的ということになる。

そして，まさにそれこそが，「海外文化研修」の意義なのである。

ひと夏の海外体験は，それだけで完結するものではもとよりなく，むしろ出発点である。研修の参加者たちがこの研修をきっかけに，さらに深く英語を学ぶようになり，その成果を各々の将来に生かしていくことを，心から願うものである。

（とりかい　くみこ　本学観光学部教授
全カリ運営センター英語教育研究室主任）

参考文献

Brown, H.D. (1994). Teaching by principles : An interactive approach to language pedagogy. Prentice Hall Regents.

Deci, E.L. (1975). Intrinsic Motivation. Plerum Press.

Gardner, R.C. & Lambert, W.E.(1972). Attitudes and motivation in second language learning. Newbury House.

Maslow, A.N. (1970). Motivation and Personality Harper & Row.